

モンゴル語母語話者における促音習得のプロセス

劉 永亮

1. はじめに

音声言語におけるコミュニケーションは話し手が音声を産出し、聞き手がそれを知覚することによって成り立つ。一般的に音声の知覚能力の習得は産出能力の習得に先行すると考えられる。つまり、正しい発音ができるようになる為には、正しく聞き取れる必要があるのではないかという推論である。しかし、Goto(1971)では日本人の英語学習者を対象とし、/r/と/l/の発音と知覚について調査し、英語能力の最も高い学習者でも、/r/と/l/の知覚は難しいが、2つの音の発音は良くできているという結果が出ている。

現在までの日本語の促音習得に関する研究の流れを見ると、音声知覚に関しては知覚実験を通じた手法により研究されている(関 1987、1993; 西端 1993; 内田 1993、1998; 西郡・篠崎 1999; 戸田 2003; 劉 2013a)。促音の産出に関しては主に発声器官の生理学的見地から研究成果が報告されている(村木・中岡 1990; 松崎 2006; 西端 1996; 戸田 1997; 劉 2013b)。しかし、上記の研究成果はそれぞれ独立して研究されてきたため、個別の機能解明はできても、相互的な機能の関係が考察されていない。本研究では、知覚・産出を個別に研究対象とするだけでなく、これらの相互作用も含め、音声コミュニケーションの中での音声知覚・産出の関係の総合的な解明を目指す。

2. 研究目的と研究方法

2.1 研究目的

本研究ではモンゴル語母語話者(以後、MS : Mongolian Speaker)¹を対象に、促音の知覚と産出の実験を同一被験者に行い、促音の知覚と産出の関係を明らかにする。

具体的には以下の3点を研究の目的とする。

- ① 日本語能力レベルの向上に伴い、促音の知覚と産出の習得状況はそれぞれどのように変化していくのか
- ② 日本語レベルによる知覚と産出の困難点はどこにあるのか
- ③ 知覚能力が向上すれば、産出能力も必ず向上するのか

2.2 研究方法

- ① 知覚実験は合成音の知覚実験を行う
- ② 発音実験は学習者の音声を日本語母語話者に評価を通じて行う

3. 研究概要

¹ このモンゴル語母語話者は中国内モンゴルで言語形成期を過ごした者で、中国北京語とのバイリンガルである。本稿では便宜的に「モンゴル語母語話者」とする。

3.1 研究対象者

今回の実験の対象者は初級・中級・上級の3つのレベルの学習者²である。初級学習者は日本語学習歴150時間程度で、N4レベルに達している(男性3人、女性7人)。中級学習者は日本語学習歴450時間程度で、N3～N2の間のレベルである(男性2人、女性8人)。上級学習者³は学習歴が既に900時間を超え、N1に合格している(男性2人、女性5人)。

3.2 知覚実験

3.2.1 刺激語の作成

本研究では合成音の2音節語の単独提示による知覚実験を行う。聴取実験の刺激語は先行母音及び後続母音を/a/に選定し、後続子音に/k/、/t/、/p/、/s/を選定した。具体的に、促音を含まない2拍語(便宜上、以後：非促音語) /aka/、/apa/、/ata/、/asa/と促音を含む3拍語(便宜上、以後：促音語) /akka/、/appa/、/atta/、/assa/のペアである。

表1 聴取実験の刺激語の構成及び表記の方法

子音の特徴	後続子音	促音の有無	拍	アクセント型	持続時間	表記
破裂音	k	(促音語)	3拍	平板型	10段階	akka-平
				頭高型	10段階	akka-頭
		(非促音語)	2拍	平板型	10段階	aka-平
				頭高型	10段階	aka-頭
	p	(促音語)	3拍	平板型	10段階	appa-平
				頭高型	10段階	appa-頭
		(非促音語)	2拍	平板型	10段階	apa-平
				頭高型	10段階	apa-頭
	t	(促音語)	3拍	平板型	10段階	atta-平
				頭高型	10段階	atat-頭
		(非促音語)	2拍	平板型	10段階	ata-平
				頭高型	10段階	ata-頭
摩擦音	s	(促音語)	3拍	平板型	10段階	assa-平
				頭高型	10段階	assa-頭
		(非促音語)	2拍	平板型	10段階	asa-平
				頭高型	10段階	asa-頭

音声資料の作成にあたっては、1名の男性(東京話者)⁴に音声実験室で発音して

² 学習者の日本語能力レベルの判断を実験前のフェースシートによって分けた。

³ 上級学習者は中国国内にいなかったため、日本に留学している大学院生から選定した。

⁴ 音声資料作成に関しては自然音声を東京話者3名にチェックしてもらい、問題はないとみなした。

もらい、刺激語のアクセントを頭高型と平板型に分けた。また、音声資料の編集に関しては非促音語の無音（または摩擦雑音）の持続時間を 60ms から 20ms ずつ増加させ各系列 10 段階の音声を作った。促音語の無音（または摩擦雑音）の持続時間を 240ms から 20ms ずつ切断し、各系列 10 段階の音声を作った。よって刺激語は促音の有無（2 種類）×無声部分（摩擦雑音）10 段階×後続子音 4 種類×アクセント型 2 種類、計 160 種の音声である（表 1 を参照）。刺激語をランダムに配置し、実験を行った。

なお、被験者の知覚に対して、促音か非促音かの判断には、劉（2013b）による日本語母語話者における促音の判断境界の閾値を基準にした。その閾値より早い段階で促音だと判断したものと、その閾値が過ぎたにもかかわらず非促音だと判断したものを誤聴とした。

3.2.2 手続き

初級と中級学習者の実験は内モンゴルの大学の CALL 教室で行い、上級学習者の実験は首都大学東京の音声反響の比較的少ないセミナー室で行った。また、被験者の音声に対する被験者の直観的な知覚を把握するため、刺激語を一回だけ提示し、次の刺激語までは 5 秒ポーズを置き、5 つの刺激語ごとに一つのダミー語⁵を挿入した。回答方法は促音か非促音かの強制二分法とした。40 問ごとに 5 分ほどの休憩を作った。聴取実験は休憩時間を含めて一時間ほどとなった。実験後、各被験者に対してインタビューを行い、補足資料とした。

3.3 産出の実験

知覚実験と共に産出実験を単語リストと短文を用いて行った。

3.3.1 実験用語

(1) 単独の単語リスト

先行母音の異なることによって促音と認知する閉鎖持続時間が変化するかどうか調べるために、表 2 に示す単語を選択した。

表 2 単独の単語リスト

あか	いたい	うかり	えせい	おと
あっか	いったい	うっかり	えっせい	おっと

(2) 短文レベル

促音が含まれる 3 つの例文は全部で 165 拍、その中に促音語が 21 語（その中「いっぼん」は 2 回出現した）含まれており、例文全体の 30% を占めている。

⁵ 同じ音声を繰り返して聴かせると人間の認知能力が低下する可能性が高くなるので、ダミー語を入れた。

3.3.2 手順

録音も知覚実験と同様、初級と中級学習者の実験は内モンゴルの大学の CALL 教室で行い、上級学習者の実験は首都大学東京の音声反響の比較的少ないセミナー室で行った。日本語の「単独の単語」の読み上げをできるだけリラックスして発音することを要求し、2回ずつ発音してもらった。短文はできるだけ自然な速度で読むように要求し、録音の前に実験には使用しない他の文を読んでもらい、発話速度をチェックした。そして、「単独の単語」の読み上げと同様2回発音してもらった。録音にはICレコーダ（オリンパスV-62、サンプルングレート44.1KHz）を使用した。

なお、はじめは「単独の単語」を頭高型と平板型に読むように要求したが、くり返し行ってもできなかったため、被験者が自分の感覚で読むようにした。また、分析にあたって、学習者が一番自然に発音していると判断した「単独の単語」と「短文の中から切り出した単語」⁷10単語を分析データとして扱った。

3.3.3 音声評定の方法

学習者の音声に対する評定者は日本語母語話者である日本語教師7名（男性3名、女性4名）、と日本語教育に関わったことのない日本語母語話者6名（男性3名、女性3名）、計13名である。評定の方法としてはランダムに配置した音声資料（単独の単語10語×27人+文中から切り出した単語10語×27人、合計540語）を聞かせて、評価してもらった。評価にあたって、評価者は被験者の音声を聞いて、促音か非促音かを選択し、判別できない場合は、聞こえた音を「その他」の欄に書いてもらった。

4. 結果

4.1 日本語レベルによる促音習得の相違

上級学習者の人数が初級及び中級学習者の人数と異なるため、レベル間の比較にあたっては一人あたりの誤り率を扱うことにする。

① 知覚実験の結果

促音の知覚テストの平均正答率を日本語能力レベル別に表3にまとめた。

表3 MSによる促音の知覚の平均誤答（数）率と標準偏差

レベル	初級	中級	上級
平均値	(13.2) 9%	(11.8) 7%	(5.9) 4%
標準偏差	7.714	6.033	2.035
N	10	10	7

表3から分かるように、初級学習者の全体の誤聴率は9%、中級学習者は7%で、

⁶ 判断に関して筆者と長年日本語教育に携わっている日本語教師二人が音声を聞いて判断した。

⁷ 「短文の中から切り出した単語」とは日本人から評価を受けるときには音声を切り出して促音の含まれる単語として聞かせた。

上級学習者は 4%である。初級学習者と中級学習者の成績は非常に近かったので、成績間に差がないかを確認するため t 検定を行った。その結果、有意差が見られず、上級学習者との間には有意差が見られた。これにより中級から上級レベルにかけて知覚能力がはるかに向上することが分かった。

また、MS 学習者の促音の知覚は初級レベルからかなり高いと推測できるが、初級学習者と中級学習者の標準偏差はそれぞれ、7.71 と 6.03 である。一方、上級学習者の標準偏差は 2.04 にとどまり、より安定していることが分かる。これら 3 つのレベル間について分散分析を行い、相違の有無を測定した結果、(F(3,24)=3.224, p=0.058) でレベル間に有意差が見られなかった。

②産出の実験の結果

MS 学習者の産出の評価の結果を学習レベル別に表 4 にまとめた。全体的に見ると、初級学習者の誤り率が 11.85%で、中級学習者の誤り率が初級学習者よりも多少高く 12.19%で、上級学習者の誤り率は 3.68%であった。これら 3 つのレベル間について分散分析を行った結果 (F(3,24)=8.147, p=0.063)、レベル間に有意差は見られなかった。

表 4 MS による促音の産出の誤答 (数) 率と標準偏差

レベル		初級	中級	上級
度数		10	10	7
単独 10 語	平均値	(12.00)9.2%	(10.10)8.4%	(1.71)1.3%
	標準偏差	(8.51)6.5%	(8.075)6.2%	(1.89)1.5%
文中 10 語	平均値	(18.80) 14.5%	(21.60)16.2%	(7.86) 6.0%
	標準偏差	(10.02) 7.7%	(9.778)7.5%	(5.757)4.4%
合計	平均値	(30.80)11.85%	(31.70)12.19%	(9.57)3.68%
	標準偏差	(17.66)6.79%	(14.06)5.41%	(7.48)2.88%

さらに、日本語能力レベル間の成績の間に差があるかどうかを確認するため t 検定を行った。その結果、初級と中級学習者の間に差異は見られなかった。中級と上級学習者の間には差異が見られた。

次に、「単独の単語」と「短文から切り出した単語」それぞれの成績についても、表 4 から分かるように、「単独の単語」の誤り率は初級学習者の誤り率が 12.00%で、中級学習者の誤り率は 10.10%で、上級学習者の誤り率は 1.71%であった。「短文から切り出した単語」では、初級学習者の誤り率が 18.80%で、中級学習者の誤り率が初級学習者よりも多少高く 21.60%、上級学習者の誤り率は 7.86%であった。学習レベルのすべての段階で「短文から切り出した単語」の誤り率が「単独の単語」の誤り率より高い結果が得られた。特に中級学習者と上級学習者において「短文から切り出した単語」の誤り率が「単独の単語」の誤り率よりはるかに高かった。

また、「単独の単語」と「短文から切り出した単語」それぞれの成績について学習レベル間に差があるか、t 検定を行った結果、「単独の単語」では学習レベル間に有意差

が観察されず、「短文から切り出した単語」では、学習レベル間に有意差が見られた。

4.2 日本語レベルによる習得の困難点

①知覚の困難点

MS 学習者に対して促音の知覚の困難点は何処にあるかを調べるため、まず系列ごとの誤聴率をまとめた。

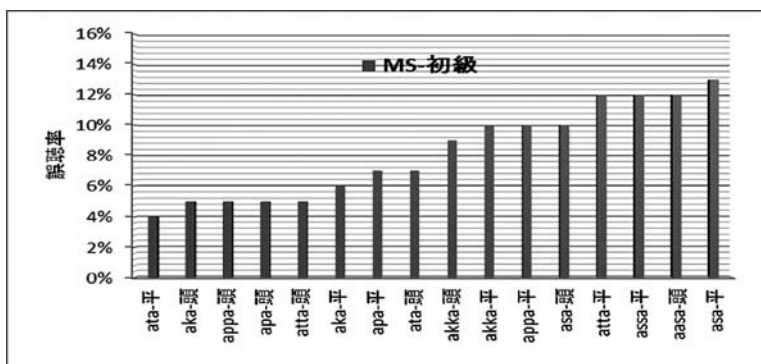


図1 MS—初級の誤聴率

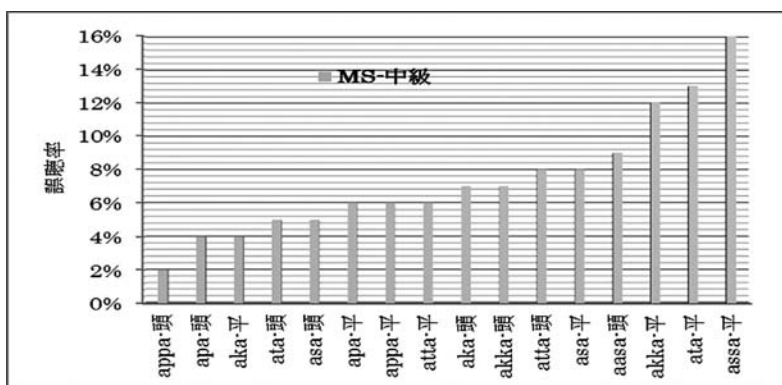


図2 MS—中級の誤聴率

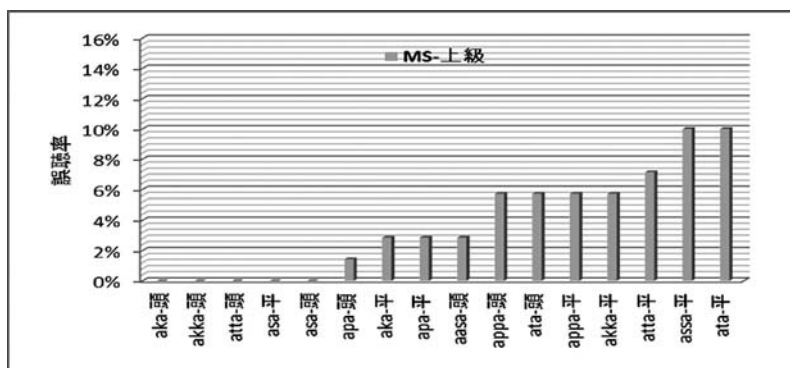


図3 MS—上級の誤聴率

図1～図3は日本語能力レベルごとの誤聴率を示す。初級レベルの誤聴率を示す図1を見ると、誤聴率が10%を超えたのは系列「atta-平」以外、摩擦雑音の系列である「assa-平」、「assa-頭」と「asa-平」であることが分かる。中級レベルの誤聴率図2を見ると中級レベルで誤聴率10%を超えているのは「akka-平」系列、「ata-平」系列、そして「assa-平」系列になっている。つまり、後続子音に関係なく、アクセント型が平板型のほうが誤聴率は高くなっていることが分かった。さらに、上級レベルの誤聴率を示す図3の結果を見ると、「assa-平」系列と「ata-平」系列は誤聴率が10%になっていることが分かる。上級レベルの全体の誤聴率の傾向を見ても、中級レベルの誤聴ケースと類似しており、聞き取りに間違いやすい項目はやはりアクセント型が平板型であることが分かる。

表5 判断閾値前後の誤り数

子音の特徴	後続子音	初級		中級		上級	
		促音の誤り	非促音の誤り	促音の誤り	非促音の誤り	促音の誤り	非促音の誤り
破裂音	/k/	15	15	16	14	2	4
	/p/	5	22	5	14	3	7
	/t/	12	16	10	21	7	9
	合計	32	53	31	49	12	20
摩擦音	/s/	37	10	30	8	6	0

次に、学習者は判断閾値前後の誤り、つまり促音の誤り⁸と非促音の誤り⁹は学習レベルによってどのように異なるのか、また、後続子音の特徴が促音知覚の判断に影響を与えるかを調べた。その結果、表5に示すように、後続子音が無声破裂音の場合、促音の誤りは初級、中級と上級それぞれ、32個、31個、12個で、非促音の誤りは初級、中級と上級それぞれ、53個、49個、20個があった。一方、後続子音が摩擦雑音の場合、促音の誤りは初級、中級と上級それぞれ、37個、30個、6個で、非促音の誤りは初級、中級と上級それぞれ、10個、8個、0個があった。

学習レベルに関係なく非促音の誤りは促音の誤りより多かった。一方、後続子音が摩擦雑音の場合、後続子音が破裂音の場合の結果と違って、促音の誤りは非促音の誤りより多かった。また、全体的に日本語レベルの向上につれて、誤りの数は減少していく傾向が見られた。

②産出の困難点

まず、促音を含む単語（便宜上、以後：促音語）と促音が含まない単語（便宜上、以後：非促音語）による産出の習得状況を把握するため、実験語を促音語と非促音語に分類し、評価の結果を学習レベル別に平均誤りを図4に示した。

⁸ 判断基準を過ぎたにもかかわらず促音ではないと判断することを指す。

⁹ 判断基準より早い段階で促音だと判断したものを指す

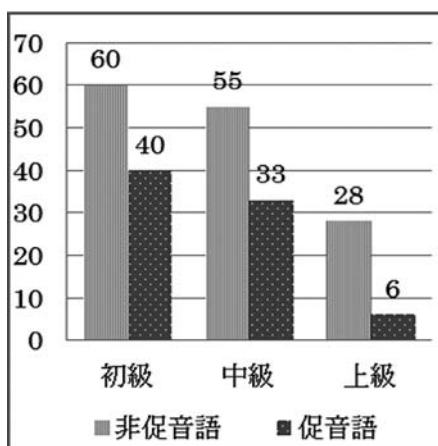


図4 産出の誤り数

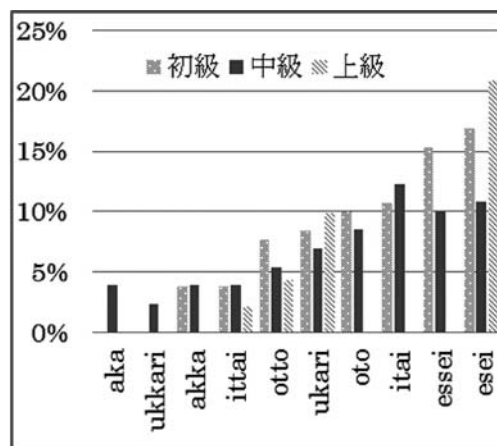


図5 実験語ごとの誤り率

図4で示すように、促音語の誤り、初級、中級、上級はそれぞれ、40個、33個、6個であった。それに対して非促音語の誤り率は60個、55個、28個であった。即ち、日本語能力レベルを問わず、非促音語の誤りが促音語の誤りより多く見られた。

次に、実験語の特徴は産出に影響与えるかという観点から検討すると、図5に示すように、日本語能力レベルに関係なく全体的に誤り率が5%を下回るのは、/aka/、/ukkkari/、/akka/そして/ittai/であるが、誤りが最も多かったのは/esei/と/essei/であり、10%も超えている。レベル別に観察してみると、初級学習者は/aka/、/ukkkari/に間違いを起こさなかったが、/esei/と/essei/にはほかの実験語よりはるかに多くの誤りを起こしている。中級学習者は全体的に誤りを起こしている。上級学習者になると誤りは特定の/ukari/、/esei/の発音に関しては、上級学習者でありながら、ほかのレベルの学習者よりも誤り多かった。

4.3 知覚と産出の関係

本節では知覚と産出の関係を検討する。そこで、聴取実験のデータを正聴率として数値化し、被験者の「知覚能力」とした。一方、学習者の発音（「単独の単語」と「短文から切り出した単語」）を日本語母語話者13名に評価させた評定値を数値化し、被験者の「産出能力」とした。

下記に示す 図6～図8は被験者の日本語能力レベル別、促音の知覚能力と産出能力の相関図である。縦軸は知覚能力を示し、横軸は発音能力を示したものである。図6は初級学習者の促音の知覚能力と産出能力の相関図である。図6の結果から分かるように知覚と産出の間には強い相関 ($r=0.823$) が見られた。また、最小二乗法を用いて単回帰分析を行った。その結果、決定係数 $R^2 = 0.67$ であり、発音により知覚をも予測することができる可能性が高い。つまり、初級学習者は基本的に発音能力が高い学習者ほど知覚能力も高くなることが分かった。

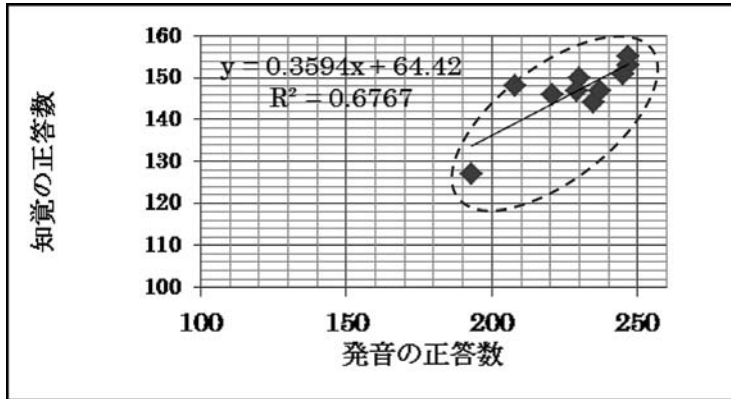


図6 初級 促音の知覚と発音の分布

図7は中級学習者の促音の知覚能力と産出能力の相関図である。知覚と産出の間には弱い相関 ($r=0.333$) が見られた。また、最小二乗法を用いて単回帰分析を行った。その結果、決定係数 $R^2 = 0.112$ であった。

図7の結果から分かるように中級学習者は初級学習者と違って発音がうまくできる学習者が、必ずしも知覚も優れているとは言いにくい。

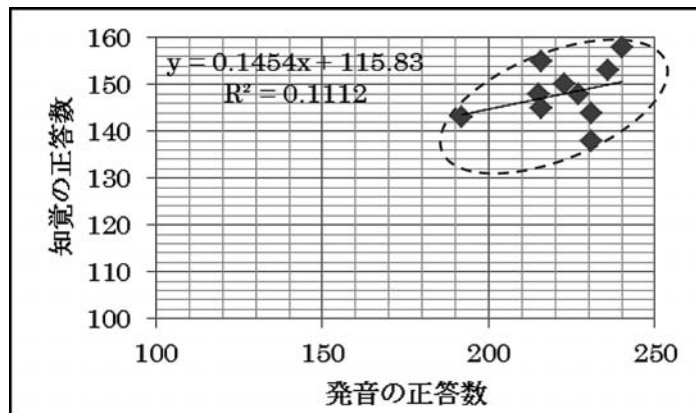


図7 中級 促音の知覚と発音の分布

図8は上級学習者の促音の知覚能力と産出能力の相関図である。知覚と産出の間には中程度の相関 ($r=0.427$) が見られた。最小二乗法を用いて単回帰分析を行った結果、決定係数 $R^2 = 0.25$ である。上記の結果から分かるように上級学習者は発音能力が高い学習者ほど知覚能力も高くなることのある程度予測できる。

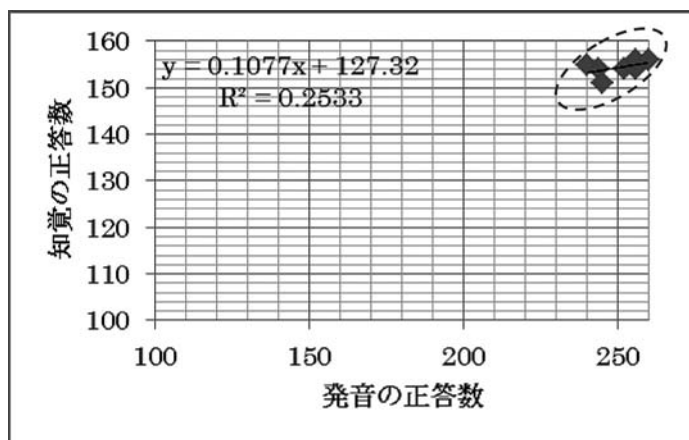


図8 上級 促音の知覚と発音の分布

5. 考察

5.1 日本語レベルによる促音習得の相違

①促音の知覚の面

MS 学習者の促音の知覚は初級レベルからかなり高かった。初級学習者と中級学習者の成績間にも有意差が見られず、上級学習者との間には有意差が見られたことから見ると、初級から中級にかけて、促音の知覚が進化されず、停止している。しかし、中級から上級レベルにかけて知覚能力がはるかに向上することが分かった。

さらに詳しく標準偏差を見ると、初級と中級では学習者によって促音知覚は安定しないことも推測できる。上級学習者の標準偏差は 2.04 にとどまり、より安定していることが分かる。

②促音の産出の面

MS 学習者の産出の評価の結果から見ると、学習経歴によって誤り率が必ずしも減っていくのではなく、中級レベルは初級学習者と比べると発音の誤り率は全体的に初級学習者より 0.34% 高くなっている。

それを発話スタイル別に観察して見ると、「単独の単語」と「短文から切り出した単語」では、日本語能力レベルごとの成績の違いが現れた。「単独の単語」の誤り率は初級学習者 > 中級学習者 > 上級学習者の順で、学習経歴が長くなることによって、誤り率は減っていく。しかし、「単独の単語」についてはレベル間で成績に有意差が見られなかった。このことから見ると、小熊 (2008) 結果と同様、学習経歴が単独の単語の産出には影響を与えないという結論になる。それは、単語が単独で読まれる場合には一つ一つの音に関する注意度が高くなり、初級学習者であっても自分の発音に対するモニターを十分に働くのではないかと考えられる。

それに対して「短文から切り出した単語」の誤り率は、中級学習者 > 初級学習者 > 上級学習者の順になっている。一般的に、学習期間の増加に伴って言語能力もある程度向上するべきだが、今回は逆転現象がおり、中級学習者の成績が初級学習者より

低いという結果になった。これは、発音を録音する際にも観察されたように、学習者が日本語の読み上げに初級と比べると短文の読み上げには一字一字見ながら発音するのではなく、短文に目を通しながら、途中でほとんど止まらず読み上げたことから見るとある程度熟練し、発音より文の意味内容に注目し、一つ一つの音節に注意を払わなくなる傾向が見られた。しかも、評価してもらう際、短文の中から意図的に切り出したことも、発音の評価に影響を与えたと考えられる。そのため、中級学習者の成績が初級学習者より低くなった理由だと考えられる。

また、学習レベルを問わず、「単独の単語」の成績が「短文から切り出した単語」の成績より高い結果が得られた。それは、初級学習者はほとんど読み課題の文字を一字一字見ながら発音し、文字を読むこと自体に多少の困難があると推測できる。さらに、単語より短文を読むこと及び自己の言語能力レベルを超えた文の意味を理解しようとすることで、学習者の注意が分散され、促音の産出に対するモニターが弱まってくると考えられる。

5.2 日本語レベルによる習得の困難点

①知覚の困難点

MS 学習者にとって、促音の知覚の大きな壁はどこにあるかという観点から調べたところ、初級段階では摩擦雑音/s/系列の知覚はほかの系列と比べて乱れが出ており、中級と上級学習者にとって、平板型の刺激語は頭高型の刺激語に比べて誤聴率が多くなっていることが分かった。また、後続子音が無声破裂音の場合、学習レベルに関係なく非促音の誤りは促音の誤りより多かった。一方、後続子音が摩擦雑音の場合、後続子音が破裂音の場合の結果と違って、促音の誤りは非促音の誤りより多かった。

上記の結果から見ると、モンゴル語母語話者にとって後続子音が無声破裂音の場合、促音ではないという判断は、促音であるという判断より難しく、後続子音が摩擦雑音の場合促音であるという判断は促音ではないという判断より難しいことが分かった。これは、(劉 2013b)でも指摘があったようにモンゴル語母語話者は促音を知覚するのに、その際の喉頭の緊張度をひとつの重要な手がかりにしているため、摩擦雑音のほうは破裂音より、知覚しにくいと考えられる。しかも、この現象は初級段階で一番著しかった。また、平板型も頭高型より間違いが多いことは、モンゴル語にもアクセントがあるが意味を区別する役割を持たず、しかも、アクセント核がすべて第一音節にあるという母語干渉が促音知覚に影響を与えたと見えよう。

②産出の困難点

図4から分かるように、モンゴル語母語話者において促音に関する発音の中で、最も困難な点は促音がないのに促音があるように発音することであることが分かった。また、図5にも現れたように、初級と中級学習者はほとんどの実験語に誤りを起こしているのに対して、上級学習者になると特定の/ukari/、/esei/だけに誤りを起こしていることが分かった。そして、日本語能力レベルを問わず、/esei/と/essei/といった促音の後続子音が摩擦雑音の場合、誤りが多かったことから見るとモンゴル語学習者にとっても促音の習得は後続子音が破裂音の場合、摩擦雑音の場合より先行すると言えるだろう。

5.3 知覚と産出の関係

促音の知覚と産出の密接な関係を明らかにするために、日本語能力レベル別に知覚と産出の相関を測った。その結果、学習レベルによって、相関は変わってくるのが分かった。詳細に述べると初級学習者においては知覚と産出の間に強い相関が見られ、中級学習者と上級学習者においては弱い相関が見られ、(戸田 2003) の結果と一致した。従って、モンゴル語母語話者において、初級段階では学習者の知覚の能力はよければ良いほど発音能力もよくなると解釈できるが、中級以上になると知覚能力の上達に伴って、必ずしも産出能力も向上するとは一概に言えない。

6. まとめ

本研究ではモンゴル語母語話者を対象に、促音の知覚と産出の実験を同一被験者に行い、促音の知覚と産出の習得プロセスを解明した。図 9 はモンゴル語母語話者の促音習得のイメージを表したものである。

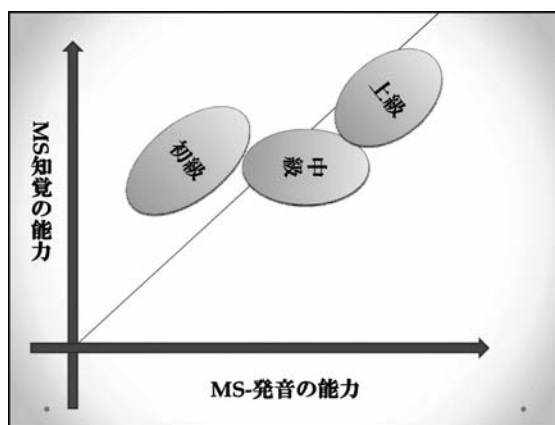


図 9 MS 促音習得プロセスのイメージ図

図 9 のように、モンゴル語母語話者における促音の習得に関して母語 (モンゴル語) が始めにはプラスの影響を与える。しかし、習得が進むにつれて、その影響は促音の習得にマイナスの影響を与えてしまい、中級学習レベルの段階では、一時的停滞化現象¹⁰が起る。上級学習レベルにかけて、停滞化現象が解除され、知覚と産出はより母語話者に近づいている。

以上のことから教育現場での促音の知覚と発音の指導に関して、特にモンゴル語母語話者に対して、モンゴル語の閉鎖音にある喉頭などの緊張さをうまく利用しながら、より早い段階で、促音の特徴である持続時間の長さ (拍感覚) を意識させながら、指導を行うとより効果あるのではないかと考えられる。

¹⁰ 「停滞期現象」とは、学習者の普遍的な発達順序において、ある期間においての学習者の学習成績は、基本文法を学習する時期と比べて停滞しており、なかなか上達しないということ (迫田、2002) より。

参考文献

- 内田照久 (1993) 「中国人日本語学習者における長音と促音の聴覚的認知の特徴」『教育心理学研究』41号 日本語教育心理学会
- 内田照久 (1998) 「日本語特殊拍の心理的な認知過程からとらえた音声と拍一定常的音声区間の持続時間に関するカテゴリー的知覚」『音声研究』2巻3号 日本音声学会
- 小熊利江 (2008) 『発話リズムと日本語教育』 風間書房
- 木村正武・中岡典子 (1990) 「発音と促音—英語・中国語話者の発音」『講座日本語と日本語教育 3 日本語の音声・音韻 (下)』 明治書院
- 迫田久美子 (2002) 『日本語教育に生かす第二言語習得研究』 アルク
- 杉藤美代子 (1989) 「音節か拍か—長音・撥音・促音—」『講座 日本語と日本語教育 2 日本語の音声・音韻 (上)』 明治書院
- 戸田貴子 (2003) 「外国人学習者の日本語特殊拍の習得」『音声研究』7・2 日本音声学会
- 戸田貴子 (1997) 「日本語学習者による促音・長音産出のストラテジー」『第二言語としての日本語の習得研究』第1号 凡人社
- 西郡仁朗・篠崎晃一 (1999) 「促音の知覚—シラビーム方言者・モーラ方言者・中国人日本語学習者—」『日本語研究』18号 東京都立大学国語学研究室
- 西端千香子 (1993) 「閉鎖持続時間を変数として日本語促音の知覚の研究—日本語母語話者と中国語母語話者との比較—」『日本語教育』81号 日本語教育学会
- 西端千香子 (1996) 「閩南語母語話者が発話する日本語の促音語・非促音語の特徴と問題点」『広島大学教育学紀要』第二部 第45号
- 松崎千香子 (2006) 「中国語母語話者の促音の発音に与えるリズム指導効果」、『甲南国文』(53)
- 関光準 (1987) 「韓国人の日本語日本語の促音の知覚について」『日本語教育』81号 日本語教育学会
- 関光準 (1993) 「日本語促音の聴取判断に関する研究」『世界の日本語教育』3号 交際交流基金
- 劉永亮 (2013a) 「モンゴル語母語話者と中国語母語話者における促音産出の相違—音響分析からみる—」『2013年度日本語教育学会春季大会予稿集』 日本語教育学会
- 劉永亮 (2013b) 「モンゴル語母語話者における促音の知覚の特徴—日本語母語話者と中国語母語話者との比較を通して—」『日本語研究』33号 首都大学東京・東京都立大学 日本語・日本語教育研究会

Goto, H. (1971) Auditory perception by normal Japanese subjects of the sounds “L” and “R” *Neuropsychologia*, 9, 317-323

(りゅう えいりょう・首都大学東京大学院博士後期課程)